

日本陸軍航空史（その 20）
～南方攻略に伴う航空運用（5）～

1 はじめに

前号で、風船爆弾について書かせていただきましたが、防大研究科同期生の M 君（元海将補）から情報を頂きました。彼が同志社大学時代に卒研で教わった某教授は風船爆弾を研究されていて、爆弾の代わりに『鳴き砂』を米国に飛ばせて環境保護運動の一環にしようと考えていたそうです。鳴き砂は非常に純度の高い砂で、環境が汚染されてゴミが混じると音が出ないそうです。

ところが、平成 4 年 11 月 23 日、琵琶湖畔で東京の男性（52 歳）が手製の風船を係留して試験中、教授の目の前で突然ロープを切り離して太平洋横断を開始し、金華山沖 800 キロ、高度 2.5 キロ、時速 70 キロでの飛行が確認されたのち、行方不明となりました。この事件は多くの方がご存知と思います。

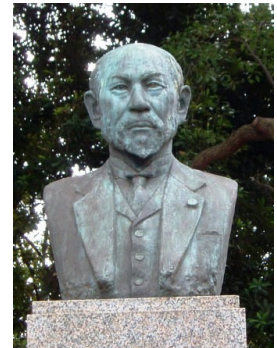
M 君からのもう一つの情報です。風船爆弾を潜水艦 4 隻に搭載し、密かに米大陸西海岸に接近して打ち上げる計画が立てられたのですが、昭和 19 年 6 月、米軍が突然サイパンに上陸を開始したために潜水艦を充当できなくなり、これが中止になったそうです。

また、陸自航空 OB の K さんから、「GPS もない時代に、爆弾を落とすタイミングはどうやって調整したのでしょうか？」という疑問が寄せられました。砂袋がすべて落ちたときに爆弾が切り離される機構になっていますので、気球の上下する回数が概略の計算によって見積もられていたのだと思います。

旧紀元節の 2 月 11 日、元航校 WAC の Y さんの案内で代々木公園にある『日本航空發始之地』記念碑を訪れました。昭和 15 年（紀元 2600 年）12 月に朝日新聞社の手で建立されました。傍には、昭和 49 年 12 月建立の徳川大尉像（航空同人会建立）と日野大尉像（航空五〇会建立）があります。



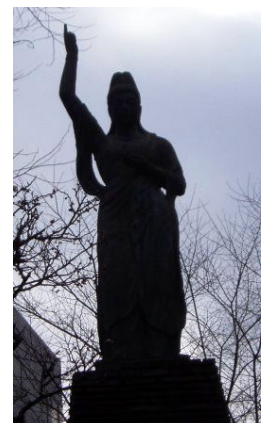
日本航空發始之地記念碑（筆者撮影）



徳川大尉像（左）と日野大尉像（右）（筆者撮影）

Y さんが次に案内してくれたのは、NHK 放送センター前の税務署の角地（東京陸軍刑務所跡地）に佇む『二・二六事件慰霊像』です。チョコレートとミルクティーをお供えして御霊の冥福を祈りました。永田事件で処刑された相澤中佐、二・二六事件で処刑された香田・安藤両大尉以下 19 名、自決した野中・河野両大尉、重臣警備警察官の殉職者 5 名並びに関連の犠牲者を祀るために、有志による

『佛心會』の手で昭和 40 年 2 月 26 日に『事件 30 年記念』として建立されました。

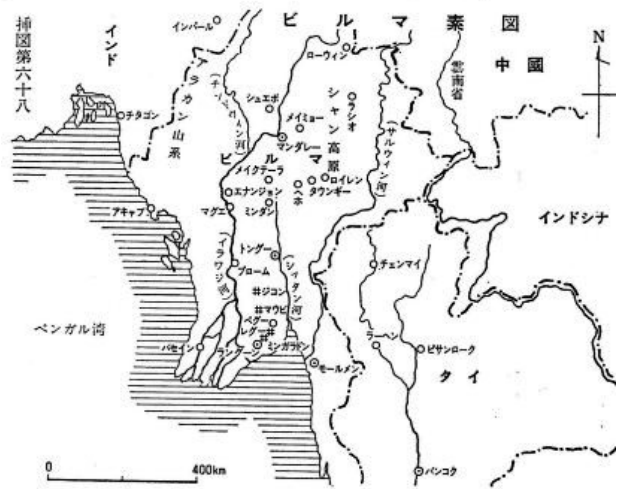


二・二六事件慰霊像の標柱（左）、祭壇（中）、観音像のシルエット（右）（筆者撮影）

今回は、中・北部ビルマの地上会戦協力及び陸軍航空の通信・気象について述べます。

2 中・北部ビルマの地上会戦協力¹⁾

ご承知のように、ビルマ攻略の目的は援蒋ルート
の遮断と対印政治工作の基盤構築にありまし
た。日本軍はタイ国から第15軍をもって攻撃
開始、昭和17年1月20日に第55師団主力
が、泰緬国境を突破し、3月8日にラングーン
を占領しました。



ビルマ素図¹⁾

(1) 中部ビルマの航空撃滅戦と地上進撃支援

○ 中部ビルマ作戦の準備

・ 南方軍の中部ビルマ攻略部署

昭和17年3月4日、第15軍(第33師
団及び第55師団基幹)に、第18師団及び

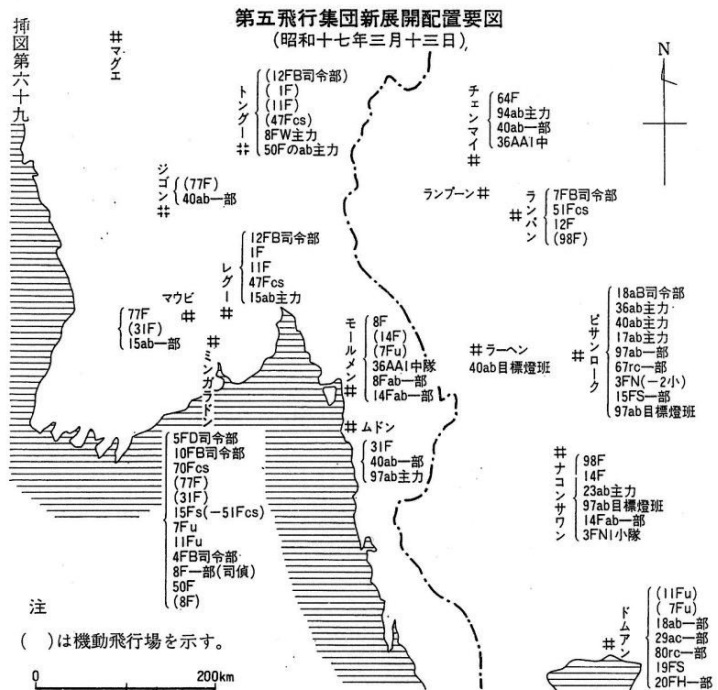
第56師団が編入されました。南方軍に対しては、「適時、中部ビルマの要衝マンダレー方面に作戦する」よう大本営から命じられ、南方軍はこれを受けて第15軍に対し、「現任務を続行するとともに、マンダレー方面の敵を撃滅する」よう命じました。

そして、第5飛行集団には、「敵航空戦力を撃滅して第15軍の作戦に直接協力するとともに、ラングーンに揚陸される輸送船団を掩護し、好機を捉えて重慶軍の後方連絡線を爆砕せよ」という命令が下されました。

・ 航空部隊の転用

南方軍は、蘭印作戦の終了により
余力をビルマ方面に転用して、一挙に
敵戦力の撃滅を図ろうと考えました。
そして、第3飛行集団に対し、次の
部隊をビルマ及びタイ国に差し出すよ
う命じました。

第15独立飛行隊、第12飛行団(2
コ中隊欠)、第7飛行団(飛行第60
戦隊欠)、第18航空地区司令部、第
17・第23・第94飛行場大隊の主力、
第36飛行場大隊、第5飛行場中隊、
第7輸送飛行隊、高射砲第20聯隊、
第15野戦航空廠の一部(1コ移動
修理班)、独立自動車第280中隊。



第5飛行集団は、「英空軍の主力は 第5飛行集団新展開配置要図(昭和17年3月13日)¹⁾
シタン河の流域、重慶空軍はマンダレー方面に展開しているものの、準備は未完」と判断し、我がエ
ナンジョンを攻撃すれば、大きな抵抗を受けずに敵を攻略できるだろうと考えました。飯田軍司令官は、
「ビルマ英軍の50耗装甲厚(97式中戦車は25耗)の戦車に対しては我が地上兵器では無理であり、
航空機に期待する」旨を集団長に伝えました。

3月13日、14日及び18日、敵空軍がミンガラドン、レゲー、ムドン及びモールメン等の我が飛行場に攻撃を加えてきました。被害は大きく、97戦3機炎上、2機大破、97司偵1機炎上、1機大破、重爆2機炎上及び双軽1機大破でした。

・ 第5飛行集団のビルマ方面航空撃滅戦準備

第5飛行集団はマグエ等に対する飛行監視をしながら、増強部隊の受け入れと、燃料・弾薬の集積を行いました。小畑集団長は3月13日、次のように軍隊区分を定め、各飛行場に3月20日までに展開させることとしました。

第15独立飛行隊(独立飛行第51中隊欠)、第12飛行団(2コ中隊欠、独立飛行第47中隊属)、第4飛行団(飛行第50戦隊の1コ中隊欠)、第7飛行団(飛行第60戦隊欠、独立飛行第51中隊属)、第10飛行団(飛行第62戦隊欠)。

各飛行部隊の展開移動状況は下表のとおりです。

各飛行部隊の展開移動状況(昭和17年3月)

部隊	区分	展開地	機種	機数(出動可能機数)	備考
	第5飛行集団司令部	ラングーン			19日に移動(司令部はインセン工業大学校)
4飛行団	飛行団司令部	ミンガラドン			19日にモールメンを出発
	8戦隊1中隊	〃	97司偵	12(6)	〃
	50戦隊(1コ中隊欠)	〃	97戦	17(13)	落下タンク114個所有
	8戦隊(1コ中隊欠)	モールメン	99双軽	32(22)	空中接触で2機喪失。20日にモールメン展開
	14戦隊	ナコンサワン	97重I	23(6)	待機訓練整備中。II型に改変予定。
7飛行団	飛行団司令部	ランパン			北部スマトラから18日、19日にランパンへ
	64戦隊	チェンマイ	1式戦 97戦 ハリケーン	15(15) 2(2) 1(1)	16日にスンゲイパタニを出発、21日に1式戦を10機受領、落下タンクは14戦隊が空輸
	12戦隊	ランパン	97重II	31	アロルスターから18日に展開完了
	98戦隊	ナコンサワン	〃	35	18日にスンゲイパタニを出発、同日展開完了
	独飛51中隊	ランパン	百式司偵 97司偵	5 5	18日、19日に移動
10飛行団	飛行団司令部	ミンガラドン			19日にムトンから前進
	77戦隊	マウビ	97戦	35(15)	20日にランパン出発、落下タンク113個所有
	31戦隊	ムトン	97軽爆	25(16)	20日にピサンロックから移動
	独飛70中隊	ミンガラドン	司偵 直協	9(5) 2(2)	19日、20日に移動完了
12飛行団	飛行団司令部	レゲー	97戦	3(3)	16日にセンパワンを出発、19日に到着。落下タンクは挺進飛行隊による一部空輸のほか、21日に第19野戦航空修理廠から100個、空輸により受領
	1戦隊(1コ中隊欠)	〃	〃	15(15)	
	11戦隊(1コ中隊欠)	〃	〃	14(14)	
	独飛47中隊	〃	2式単戦	4(4)	
	独飛50中隊/15独飛隊	ミンガラドン	司偵	?	

飛行第64戦隊(加藤隼戦闘隊)の整備能力は優秀で、上記表のように、全機稼動となっています。

陸上勤務第69中隊内山邦夫少佐率いる海上輸送班(小型船4隻)は3月18日にラングーンに到着し、200トンの資材を揚陸しました。内訳は、50キロ爆弾2,500発、機関銃弾・徹甲100箱(138,000発)、同・焼夷85箱(117,300発)、保弾子(弾をまとめてつなげる金属製のクリップ)20箱(10万個)、ヒマシ油200ドラム、鉱油100ドラムで、ミンガラドン、レゲー及びマウビの各飛行場に送られました。

3月14日、第55師団は北進を開始、ペゲー北方約60キロのニューアンレビン付近まで前進したところで戦車二十数量を含む約5千の重慶軍と衝突しました。そこで集団は第8・第31・第77各戦隊の一部を出して地上戦闘に直接協力をを行い、第55師団はそのまま北進を続けました。

○ マグエ、アキャブの航空撃滅戦

・ 3月21日から22日までの状況

小畑第5飛行集団長は、「3月21日から22日まで、マグエ飛行場及びアキャブ飛行場に対してそれぞれ4回ずつの攻撃を行う」よう命じました。

3月21日の第一撃： 攻撃準備中にミンガラドン飛行場が敵の空襲を受け、炎上1機、大破6機の大損害を出し、マグエ上空で制空中の飛行第11戦隊(97戦)長・岡部貞中佐が敵機の奇襲を受けて自爆しました。我は7機撃墜とマグエ飛行場の秘匿係留地区爆撃の戦果を挙げました。

また、ナコンサワン飛行場では、離陸操作に失敗した第98戦隊(97重II)機が約20メートルの高さから到着炎上し、同乗の戦隊長・大坂中佐以下7名が火傷及び骨折を負いました。戦隊長は重態となりました。また、第7飛行団長・山本少将の乗機が高度6千メートルで酸素吸入器の故障を起こして操縦士が失神し、約2千メートル降下したところで操縦士の意識が快復して事なきを得ました。

3月21日の第二撃： 再度マグエ飛行場を攻撃し、今回は、在地大型機21機、小型機4機の爆砕を報じました。

結局この日は、軽爆27機、重爆51機、戦闘機73機、司偵18機(いずれも延べ機数)を結集した攻撃によって、炎上8機(うち大型7機)、撃墜8機(うち大型1機)、撃破27機(うち大型24機)、合計43機(うち大型32機)の大戦果と報じられ、我が方の未帰還機は4機でした。

3月22日の第三撃・第四撃： 同じくマグエ飛行場に対して行われ、軽爆23機、重爆53機、司偵5機(いずれも延べ機数)の攻撃によって戦果は、炎上18機、火網捕捉19機以上、銃撃破4機、合計41機と報じられ、同飛行場は完全に廃墟と化しました。ただし、アキャブ飛行場には62機の在地が報じられました。

・ アキャブ飛行場攻撃

3月23日、第7飛行団は、飛行第64戦隊の16機と飛行第98戦隊の26機でアキャブ飛行場を攻撃、在地6機炎上、戦闘機撃墜2機を記録しましたが、3月24日朝、チェンマイの飛行第64戦隊が、突然、米国義勇飛行隊P-40×6機の対地銃撃を受け、一瞬にして炎上3機、破壊十数機の損害を受けました。



カーチスP-40(インターネットから)

同じく24日、飛行第12戦隊の27機、飛行第98戦隊の26機及び飛行第64戦隊の11機をもってアキャブ飛行場を制圧し、さらに27日、加藤第64戦隊長は18機をもって三度アキャブ飛行場を攻撃し、1~2機を撃墜、11機を炎上させ、これを完全に制圧しました。

○ ラングーン海上輸送掩護

3月24日にマグエに対する航空撃滅戦が完了し、第12飛行団はシンガポールからラングーンまでの4次にわたる海上輸送掩護を行いました。完全な制空権下、船団は安全に航行できました。

○ トンゲー、プローム攻略支援

・ 第55師団への直接協同

トンゲーを目指していた第55師団の攻撃が3月23日、その南で停滞し、第4飛行団に協力を求めてきましたので、モールメンの飛行第8戦隊が直ちに陣地爆撃を行いました。そして第55師団が26日、トンゲー正面陣地に到達したのに伴い、同戦隊は一部をミンガラドンに移駐させてこれを支援し、四日間にわたる激戦の末、重慶軍が守るトンゲー陣地を3月30日に陥落させました。

- ・ **第 33 師団への直接協同**

第 33 師団は、ラングーン周辺の掃蕩を終え、イラワジ河方面からエナンジョン北側地区進出を企図して前進を開始しました。第 10 飛行団はこれに協力し、敵船団への攻撃を行うとともに、3 月 26 日、戦爆合同でプローム周辺を攻撃しました。

地上部隊はプローム南方で戦車約 30 両、自動車約 200 両の敵の退路を遮断しましたが、逃げ場を失った敵が反撃してきたため、3 月 30 日朝、第 33 師団は第 10 飛行団に支援を求め、飛行第 31・第 77 戦隊が出動しました。そして、午後からは第 55 師団に協力していた飛行第 8 戦隊の一部も参加し、日没頃に、敵は車両約 200 両、火炮約 20 門、死体 500 を残して敗走します。

第 33 師団は、4 月 2 日にプロームを占領しました。

○ マグエ、シャン高原方面飛行場攻撃

- ・ **マグエの制圧**

マグエ・アキャブ両飛行場に対する航空撃滅戦で損耗した英空軍は、残存機を使用し、奇襲戦法を採用していましたので、小畑集団長はここで、マグエ飛行場に対して 3 月 31 日、83 機による乾坤一擲の総攻撃をかけました。

- ・ **ラシオ及びローウィン方面の制圧**

米国義勇飛行隊の根拠地はどこかと捜索していると、これが、昆明付近を根拠飛行場とし、シャン高原のヘホ、ロイレム、ラシオ、ローウィン、メイヨー及びマンダレー等を機動飛行場としていることが分かりました。しかし、ヘホやロイレムを攻撃しても何の反応もなく、第 7 飛行団は 4 月 1 日、ラシオ及びローウィンに進攻し、飛行場及び諸施設を攻撃しました。次いで第 7 飛行団は飛行第 12 戦隊で 4 月 2 日にサジ市街、3 日に重爆五十数機でマンダレーを攻撃しました。

(2) 中・北部ビルマ殲滅作戦の航空支援

○ 南方軍、第 15 軍のマンダレー会戦準備

- ・ **南方軍のビルマ作戦方針**

これより先の 3 月 16 日、南方軍参謀・荒尾興功中佐がラングーンの第 15 軍司令部を訪れ、作戦計画を伝えました。この際、「徹底的な退路遮断、主力をもってする繞回(じょうかい)運動、放胆な戦場統帥などの作戦指導」を要望しました。繞回運動という言葉は、日露戦争の記録に出ますが、その文脈から判断しますと迂回行動のことだと思われます。

南方軍は、「ビルマの作戦は空地とも、一度失敗したら泥沼化する」と考え、なるべく多くの兵力で一挙に敵、特に重慶軍を撃滅しようと考えました。そしてここに、地上 4 コ師団(約 9 万人)、航空機約 250 機で、重慶軍(約 5 万人)、英印ビルマ軍(約 3 万人)に対する殲滅戦が開始されようとしていました。

- ・ **直協、襲撃飛行隊のビルマ転用**

4 月 3 日、南方軍は、本格的なビルマ作戦に備えて、マレー作戦間、第 25 軍に配属していた第 83 独立飛行隊(独立飛行第 71 中隊(軍偵)及び独立飛行第 73 中隊(軍偵)を除く)を第 15 軍に配属しました。広大なビルマでは、情報収集、指揮連絡、地上戦闘直接協力のため、軍偵及び直協機が特に重要であり、これに対する要望が増大してきました。

テンガー飛行場(シンガポール)を出発した飛行第 27 戦隊(襲撃)は 4 月 20 日、トンゲー南飛行場に到着し、翌日から作戦に従事しました。同戦隊では、対空射撃による被害防止のために、燃料タンクの外側をゴム類で包む研究をしていました。

・ 司偵部隊等の増強と機種改変

大本営は南方軍に対し、**第 15 独立飛行隊(3 コ中隊)**の満洲転用を示していましたが、その代わりとして、3 月上旬、マレー、スマトラ、ジャワ作戦で活躍した百式司偵を擁する**飛行第 81 戦隊の 1 コ中隊**をビルマ作戦に転用することとし、**第 1 中隊(長・大平英雄少佐)**が 4 月上旬、ビルマに到着しました。下旬には、中隊が**百式司偵・97 司偵各 3 機**に改変されて、活躍しました。

また、**飛行第 14 戦隊**は 4 月 4 日に福生に帰り、**97 重 I 型**から**II 型**に、**飛行第 50 戦隊**は 4 月末に所沢に帰り、**97 戦**から**1 式戦 I 型**に機種改変を行いました。

・ 第 15 軍のマンダレー方面殲滅計画

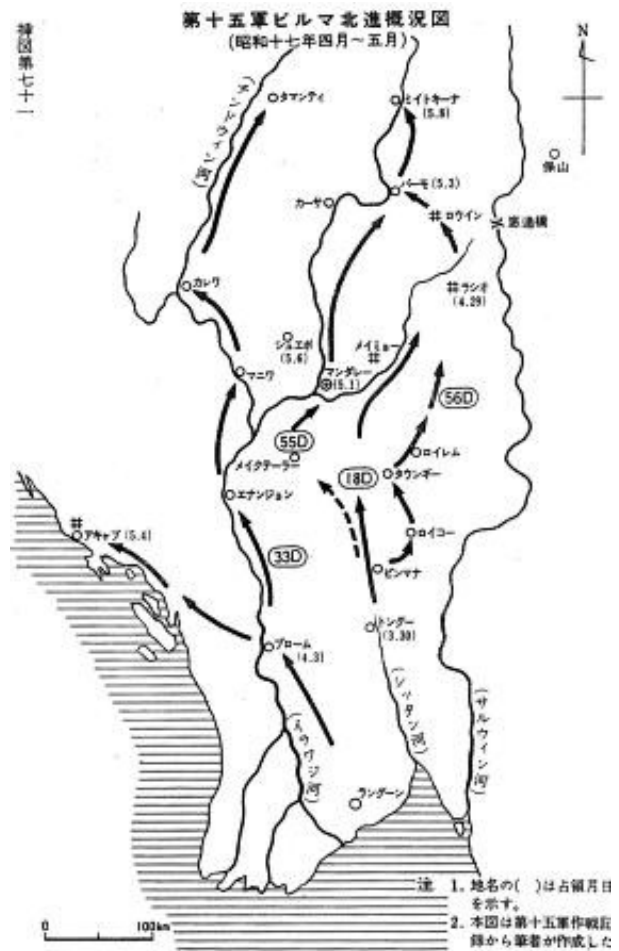
4 月 2 日、**第 15 軍**は**トンゲー**に戦闘指令所を推進しました。当面の敵重慶軍は約 9 コ師団と見積もられました。**第 15 軍**の殲滅戦計画のあらまは右図のとおりです。

第 56 師団(長・渡邊正夫中将)：シッターン河を渡り、**ロイコー**ー**ラシオ**道を**ラシオ**に突進。

第 18 師団(長・牟田口廉也中将)：**トンゲー**ー**マンダレー**鉄道以東の地区を**マンダレー**東側に進出。

第 55 師団(長・竹内 寛中将)：**第 18 師団**の左翼地区、**マンダレー**南西側を目標に中央を前進。

第 33 師団(長・櫻井省三中将)：**イラワジ**河東岸地区を北上し**エナンジョン**北側地区に進出して、敵主力の右翼を包囲。



第 15 軍ビルマ北進概況図(昭和 17 年 4 月～5 月)¹⁾

○ 第 5 飛行集団の地上会戦支援準備

・ 第 5 飛行集団長の企図

3 月末、**第 5 飛行集団**主力(**第 4・第 10・第 12 飛行団**)は南部ビルマ、**第 7 飛行団**はタイ国北部地区に展開していましたが、小畑集団長は地上軍の北進に伴い、航空地区部隊を**トンゲー**、**ジゴン**、**プロム**方面の占領飛行場に推進し、逐次、戦闘・軽爆部隊の主力を展開して、地上作戦に協力するよう部署しました。また、随時、**アキャブ**、**ラシオ**の撃滅を企図しました。さらには、司偵、特に百式司偵、通信、航測、気象部隊等の増強を要望しました。

・ アキャブ及びローウィン飛行場制圧

4 月 4 日、未明に敵重爆数機が**ラングーン**を爆撃にきましたので、小畑集団長は**飛行第 64 戦隊**に**アキャブ**飛行場攻撃を命じました。そして、4 月 8 日には**ローウィン**飛行場に敵を認めた加藤部隊長以下が攻撃に行きます。しかし、このときには上空に待機していた二十数機の **P-40** によって、**安間克巳大尉(中隊長)**、**奥村宗之中尉**、**黒木忠夫中尉**及び**和田春人曹長**の四人を一挙に失いました。

それでも、4月10日にまたローウィン飛行場攻撃に行きますが、加藤部隊長はここでも三砂曹長及び後藤曹長を失います。

・ 第7飛行団等の南部ビルマ展開

北部タイに展開していた第7飛行団は4月20日から移動を開始し、団司令部は4月25日にミンガラドン、飛行第64・第98戦隊はトンゲー、飛行第12戦隊はミンガラドンに月末までに展開しました。

なお、昭和17年4月15日付で、第5飛行集団は第5飛行師団に改変されましたので、4月15日以後の記述については『飛行師団』とします。

・ 帝都空襲に伴う一部飛行部隊の転用

4月18日の帝都空襲に伴い、大本営は4月21日、トンゲーに展開していた独立飛行第47中隊(キ44鐘馗)の本土復帰を命じました。キ44は実用審査を兼ねての実戦配備であり、足が短く、補給・整備もうまく追従していなかったこともあり、この措置は当然ではありましたが。

時を同じくして、比島の飛行第62戦隊(重爆)は南京、マレーの飛行第90戦隊(双軽)は廣東に転用されました。

○ マンダレー、ミトキーナ方面地上進撃支援

・ マンダレー方面地上会戦協力

5月1日時点で第18師団はマンダレー突入態勢にあり、第33師団の先遣隊はマニワに進出していました。第33師団はマニワにおいて、マンダレーから撤退してきた敵と激戦になりました。そして、第18師団は飛行第8戦隊、第33師団は第10飛行団が支援しました。やがて、5月3日には敵が完全に敗走態勢となりました。

・ バーモ、ミトキーナ進撃の支援

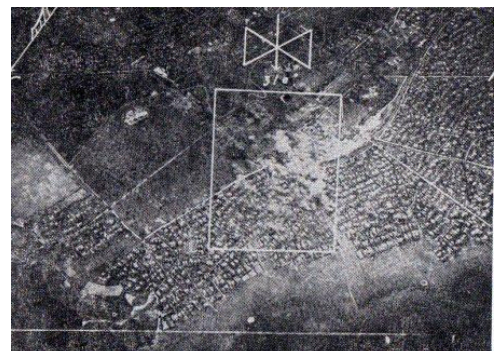
4月29日にラシオ突入を果たした第56師団は、飛行第27戦隊(襲撃)等の支援を受けてバーモ、ミトキーナ付近の敵退路に向かい、5月3日、バーモを占領しました。バーモには敵が放置した兵器や資材が多数あり、航空発動機の工場もありました。米国製航空機の組み立て中のものが6機あったほか、二十数機分の部品も残されていました。5月8日、第56師団は北部の要衝であり、鉄道の終点となっているミトキーナを占領しました。

・ 北ビルマ追撃作戦支援

第4飛行団及び第10飛行団は5月6日以降、北ビルマ追撃作戦を引き続き支援しました。5月8日と9日には、第7飛行団がインドのチタゴンを攻撃し、燃料集積所及び小型船舶5隻を炎上させました。

また、10日には、第7飛行団の一部がインドのインパールを攻撃し、100 匁爆弾 162 発を投下しました。

第12飛行団は97戦から1式戦に機種改変し、5月20日までにミンガラドンに集結しました。



インパール爆撃¹⁾

5月18日、第15軍はビルマ方面の主要な作戦が終了したことを南方軍に報告しました。また、第5飛行師団は、4月中旬以降、撃墜18機、地上撃破46機、輸送車両撃破700両及び列車破壊33両の戦果があったことを報じました。

(3) ビルマ方面航空作戦の一段落

○ ビルマの安定確保と第 5 飛行師団の新任務

5 月中旬、敵の地上・航空兵力はインド及び支那方面に撤退し、ビルマ進攻作戦は終了しました。

撤退した航空兵力は、インドに英軍機 200 機以上(カルカッタに約 180 機)、米軍機 30 機、支那の昆明に大型 5 機、P-40×30~40 機と報じられました。

5 月 18 日、南方軍は第 15 軍に、「ビルマ要域の安定確保と、ビルマ平定後、第 5 飛行師団の防空及び航空基地設定の援助」を命じました。

また、第 15 軍が第 5 飛行師団に与えた命令は、次のようなものでした。

4 月 15 日付で、第 3 飛行集団も第 3 飛行師団に改変されています。

- 一 依然第十五軍司令官ノ行フ作戦ニ協力スルト共ニ適時英支空軍ノ擡頭ヲ破壊ス
但シ努メテ雨期地帯ヲ避ケ戦力ヲ増進ス
- 二 「ラングーン」附近ノ要地ヲ防空ス
- 三 飛行師団ノ作戦地域左ノ如シ

第三飛行師団

第十六軍、第二十五軍、「ボルネオ」守備軍作戦地域(但シ「小スンダ」列島ヲ除ク)トス
第五飛行師団

第十六軍、第十五軍作戦地域及「タイ」国トス

両飛行師団ハ相互協定シ他師団ノ作戦地域ヲ使用スルコトヲ得

○ 保山、昆明方面の航空攻撃

第 15 軍は進攻作戦から平定作戦に移行しました。

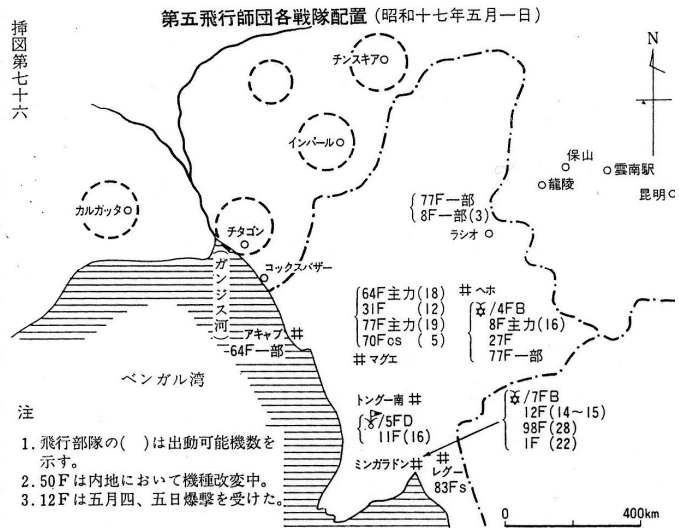
第 4 飛行団は、5 月 23 日及び 24 日、第 56 師団と怒江で対峙している重慶軍の後方連絡線遮断を企図して、司偵中隊、飛行第 77 戦隊大 1 中隊及び飛行第 8 戦隊主力で保山を攻撃しました。第 5 飛行師団長は第 4 飛行団の保山攻撃で一応北部ビルマ掃蕩戦は終了したものと考えましたが、5 月 25 日、突然、龍陵、拉孟付近の支那軍が反攻を開始したため、これに対応しました。

しかし、地形が急峻で地上戦闘直協が困難なため、6 月 2 日、飛行第 27 戦隊の一部によって 100 個の物量を空中投下しました。また、飛行第 8 戦隊(司偵、双軽)によって、5 月 31 日及び 6 月 2 日、雲南駅南飛行場を攻撃して成果を挙げました。

○ 雨季態勢への移行

5 月 22 日にアキャブで、加藤第 64 戦隊長が戦死されたことは第 14 号で書きましたので、省略します。第 5 飛行師団は 6 月以降、雨季態勢に以降して、戦力の回復を図ることとしました。

しかし、5 月 20 日以降、カルカッタ方面の敵空軍は活発に我が飛行場を攻撃してきました。



第五飛行師団各戦隊配置(昭和 17 年 5 月 1 日)¹⁾

3 陸軍航空の通信・気象²⁾³⁾⁴⁾

(1) 航空通信司令部の編成³⁾

航空部隊にとって通信は非常に重要な地位を占めていますが、航空通信司令部の編成は著しく遅れ、昭和 18 年 8 月、第 2(新京)と第 3(シンガポール)が編成されたのが最初でした。第 2 は昭和 19 年 6 月に比島に移動します。

そして、昭和 20 年 2 月に第 1(福岡)と第 5(京城)が編成されます。第 4 は第 2 が比島に移動したのちに満洲で編成されました。そして第 4 は昭和 20 年に東京に移動して、東日本の通信を統制することになります。

(2) 航空通信聯隊(隊)³⁾

航空通信聯隊は昭和 13 年 9 月に新京で第 1 が新編され、本部、4 コ中隊、教育隊及び材料廠から成り定員は 1,314 名でした。従来は飛行聯隊が担当していた通信網を引き継ぐ専任部隊です。

参考文献 3 によりますと最終的には 21 コ聯隊となっていますが、インターネットでは 13 コ聯隊しか確認できませんでしたので、その数はよく分かりません。聯隊の人員は地域によって異なりますが、1,400 名から 1,700 名だそうです。

これより規模の小さいのが航空通信隊で、第 17・第 22 航空通信隊(クラーク)と第 21 航空通信隊(首里)がありましたが、それぞれの地で玉砕しています。通信隊に適任の指揮官を求めるのは非常に困難で、各兵科から転科した陸士 30 期代の中佐が過半数を占めたそうです。

最終的には、第 1 航空通信団(2 コ通信聯隊、司令部福岡)と第 5 航空通信団(5 コ通信聯隊、1 コ航空固定通信隊、1 コ航測隊、司令部南京)という大きな組織も作られました。

(3) 固定通信隊と対空無線隊³⁾

大出力の無線機を装備し、各戦域間の通信を航空独自で行うために設けられたのが、固定通信隊です。300 名前後の人員で、昭和 18 年に樺太、新京、ジャワ、マニラ、南京等で編成されましたが、ジャワとマニラは翌年に廃止されました。

対空無線隊は、飛行場在空機との無線通信を担当するために 58 コ隊が編成されました。昭和 19 年までにそのほとんどが編成を完了し、人員は 220 名で、隊長には陸士 53 期以降の大尉が任命されたそうです。

(4) 航空情報聯隊(隊)³⁾

第 1・第 2 航空情報隊が昭和 13 年 8 月に編成され、昭和 14 年から満ソ国境方面に配置されました。編制人員は 349 名で、対空無線機 2 号などを装備し、目視による対空監視を行い、敵機来襲を無線で飛行部隊に急報する役目でしたが、敵の反攻が本格化した昭和 18 年夏以降は一部が航空情報聯隊となり、同年秋からは電波警戒機(レーダー)が装備され始めました。

参考文献 3 によりますと、終戦までに航空情報聯隊は 11 コ(うち第 1 航空情報聯隊は教育部隊)、航空情報隊は 15 コ編成されました。規模は作戦地域によって異なり、航空情報聯隊は中佐を長とする 1,500 名前後、航空情報隊は少佐を長とする 900 名前後でした。ただし、内地等の地上軍の航空情報部隊を引き継いだ航空情報隊(第 31～第 37、第 34 が欠?)は 3 千人から 6 千人だそうです。

終戦が近づくにつれて、航空情報部隊には多くのレーダーが装備され、伝達速度も向上しました。そして、昭和 20 年 6 月になると、77 名の第 1 電波誘導隊(航空総軍直轄)が編成され、18 号で述べた、いわゆる和製バッジシステムの試行運用が行われます。

このほか、敵の通信を傍受し解析する部隊として、第2・第5航空軍司令部に特殊情報部、各戦域に第1～第9航空特殊通信隊がありました。250名前後で組織され、大活躍したそうです。

(5) 航測聯隊(隊、中隊)³⁾

航空情報隊には情報と航測の各1コ中隊があつて、早期から、地上方向探知機によって敵電波の方位測定を行っていました。昭和16年、漢口で新編された第17航測隊は同年11月にサイゴンに進出し、飛行部隊の展開を支援しました。その後、水戸で編成された第1航測聯隊(聯隊はこの1コ)が昭和17年4月に浜松に移駐し、これが母体となつて、第3～第8航測中隊が編成されました。

参考文献3によりますと、結局10コ航測隊が編成され、そのうち硫黄島特別航測隊は現地で玉砕しました。終戦時で第1航測聯隊が2,098名、航測隊が200名前後だったようです。ただ、残念ながら、飛行部隊のほうでこれを活用する着意があまりなかったようです。

(6) 航空路聯隊(部)³⁾

航測部隊があまり活用されなかったのですが、航空路聯隊もあまり活用されませんでした。

昭和16年10月、航空路上の飛行場相互間の保安通信を行うために第1航空路聯隊が編成され、南支から南部佛印に至る航空路が設定されました。その後、若干の飛行場中隊が配属されて、飛行場における勤務も実施しました。

昭和18年2月、マニラとウェワク(ニューギニア)を結ぶ第1航空路部が編成され、同年8月、第1航空路聯隊が改称され、シンガポールと各地を結ぶ第2航空路部となりました。そして、昭和19年8月には、内地と各戦域を結ぶ中央航空路部、マニラと南方各戦域を結ぶ南方航空路部、支那大陸各地を結ぶ第3航空路部、そして満洲の第4航空路部と、全戦域を結ぶ航空路網が完成しました。

しかし、その頃には、飛行部隊の練度は低下しており、これを活用できる部隊は少なかったようです。

(7) 気象聯隊(隊)³⁾

日華事変の頃から野戦気象隊が数コ編成されていましたが、大東亜戦争開戦に際し、気象大隊及び独立気象中隊が編成され、各戦域の航空作戦に協力しました。そして、昭和17年9月、気象聯隊と野戦気象隊として改変・編成が始まり、終戦時の規模は、4コ聯隊、6コ野戦気象隊でした。

参考文献3によりますと、編制定員は聯隊で1,500～2,000名、野戦気象隊で700～1,200名だったようです。

(8) 航空通信保安の回想(仲野好雄大佐:陸士35期)²⁾

参考文献2に寄稿された随筆の中から、陸軍航空の通信に関する仲野大佐の文章を紹介します。前述のように、あまり飛行部隊から活用されなかったシステムもあり、すべてがうまくいったわけではないでしょうが、仲野大佐の通信にかける情熱が伝わってきます。

○ 仲野好雄大佐の経歴

元英国駐在武官、航空通信保安長官部高級参謀、参謀本部第11課(通信)長。昭和13年8月に工兵科から、氏曰く『航空強制転科』を命じられ、下志津飛行学校教官に着任、すぐに第1回航空轉科将校集団教育に参加、その後、陸大第1回航空専攻学生として5ヵ月間学んだあと、河邊正三大佐を学生長とする第2回航空轉科将校集団教育を担当しました。



河邊大佐(中将時代)⁴⁾

その後昭和13年8月に**英国駐在武官**となり、昭和16年12月に帰国後、**水戸の航空通信学校**に赴任、教官兼研究部高級主事として日本の航空通信・保安について学びました。

そして、昭和17年8月に**大本営陸軍部航空通信保安長官部**が創設されるとともに高級参謀となり、昭和18年8月には現職のまま**参謀本部第3部第11課長**として、**陸軍航空の通信**(地上における通信)、**暗号、電波兵器、航空通信、保安及び気象**を担当しました。

○ 英国から行った日本の航空・通信への健言

・ 電波兵器主体防空体制への抜本的改革

世界の防空体制は、秒速330メートルの対空聴音器、照空燈、高射砲主体だが、II WW 開始直前の英国は秒速10万メートルの電波警戒機と高射砲の連動方式に移行中につき、我が国の防空体制の抜本的改革が必要である。

・ 英独航空決戦から得た教訓

独空軍の急降下爆撃機及びメッサーシュミット戦闘機は世界の脅威だが、メッサーシュミットが単発砲であるのに対して、英戦闘機(スピットファイア、ハリケーン)は多発砲翼内装備であり、メッサーシュミットが3倍の勢力をもってしても制空権を獲得できなかった。

・ 英電波兵器の超偉力

制空権獲得に失敗した独空軍は夜間盲爆によって英国民の戦意喪失を企図したが、英国は夜間においても彼我を識別し、敵機撃墜を可能とする電波兵器を開発しており、また敵の爆撃機誘導電波を攪乱する等、電波戦に成功している。

・ 夜間濃霧中の飛行及び離着陸装置開発の具申

視界ゼロに近い濃霧中を離着陸する英空軍に対し、夜間・濃霧中はほとんど飛ばない日本陸軍航空の現状打破が必要である。

・ 独の海上封鎖作戦を無力化した電波兵器の威力

英軍は、北海に進出した独軍豆戦艦を視距離外からレーダー射撃で撃沈し、また、独の潜水艦を夜間、レーダーにより捕捉し爆雷によって撃沈した。また、英国の電波戦の成果を受け継いだ米国科学陣が著しい性能向上を図っている。

・ 英国から見たII WWの観察から大東亜戦争の見通しと今後の対策

昭和16年10月、「国賊と言われても米英との開戦を阻止する」と言いながらの帰国の途中、太平洋上で開戦を知り12月27日に帰国した。12月31日、大本営首脳に対して、「独・伊頼るに足らず、米英の実力おそるべきものあり。枢軸側は勝てないと思うので、負けぬ工夫こそ大切だ。それには①今次大戦の決戦兵器は航空機と電波兵器である。航空機優先に徹し、航空戦力の思い切った拡充と大東亜全戦域の自由な集中移動を可能にする航空通信保安体制の確立並びに電波兵器開発、②蒋介石政権との和解の秘策は・・・」と具申したところ、**武藤軍務局長**から「仲野好雄とは何者ぞ」と言われた。

○ 航空通信保安長官部参謀時代の回想

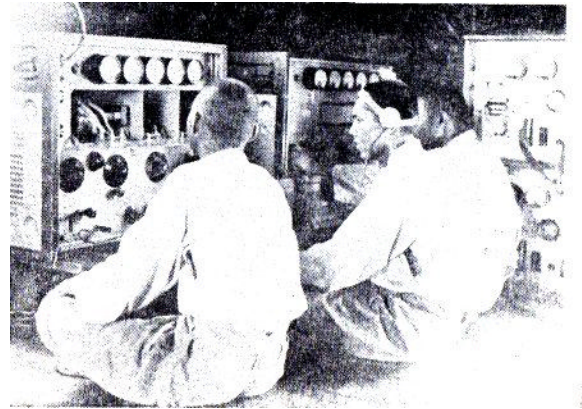
わずか1ヵ年で大東亜全域に曲りなりにも航空路を完成し、移動を可能にした。しかし、せっかく苦心して作った中波ビーコンが敵側に多く使用される結果になったのは残念である。

大本営航空通信隊を中核とした大東亜全域に配置した対空警戒器情報は即時大本営で傍受、これを全域に3分以内に再放送するシステムを作った。

電波兵器開発の手遅れ打開策については、参謀本部通信課と交渉してもらちが明かないので、第3部長若松中将に直訴したところ、自分が現職兼務で命じられた。しかし、専任参謀とするべきだった。

○ 航空通信保安長官部参謀兼参謀本部通信課長時代の回想

通信課長となり、電波兵器開発の主管課となることを主張したが、参謀本部条例上、エレクトロニクスの何たるかも知らない第1部第3課(編成・動員担当)となる。それならば、陸海軍が別々に研究組織を作り、しかも陸軍内に10以上の研究所を作り、人員・器材を分散する第3課及び航空本部案に対し、「英国の例に倣い科学力のすべてを結集すべきだ」と主張したが聞き入れられなかった。



通信隊の活動¹⁾

サイパン陥落後本土空襲が近いと判断し、富士山頂に防空通信基地を構成した。そして、鳥島の情報傍受所からの翻訳情報を富士山頂で受信して、防衛指令所に伝達し、防空に寄与した。

おわり

次回は「戦略転換と航空軍戦備」

< 参考文献 >

- 1) 「戦史叢書 南方進攻陸軍航空作戦」(昭和45年3月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 2) 「陸軍航空の鎮魂」(昭和54年3月2版 航空碑奉賛会)
- 3) 「続 陸軍航空の鎮魂」(昭和57年4月 航空碑奉賛会)
- 4) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(3)」(昭和51年5月 防衛庁防衛研修所戦史室)